

# ピロストラトス『テュアナのアポッローニオス』における サスペンスの技法

勝 又 泰 洋

## I. 序論

ローマ帝政期ギリシア文学の代表的著述家ピロストラトス（後 170～245 頃）による『テュアナのアポッローニオス』は、カッパドキアの伝説的哲人アポッローニオスの生涯（中心にある出来事は彼が敢行した世界旅行）を綴った、全 8 巻から成る伝記作品である。本作は、基本的に、「第二次ソフィスト思潮」のその他の伝記作品と同様、「言行録」の性格を強く帯びており<sup>1</sup>、その意味で、作品全体が有機的にまとめられているわけではなく、むしろ、個々のエピソードが互いに必然的なつながりを持たぬまま羅列されている（英語でいう *episodic*）という体裁を有する。たとえば、6.36-43<sup>2</sup>はその好例で、ここにおいては、それぞれ異なった状況におけるアポッローニオスの言行がひたすらに列挙されていくのみである。小見出しとともに順番に並べるとすると、「自身の低い教養レベルに無関心な青年にたいするアポッローニオスの説諭」（6.36）、「サルディスでの（互いに異なる）二つの出来事にたいするアポッローニオスの反応」（6.37）、「分裂したアンティオキアの民にたいするアポッローニオスの助言」（6.38）、「家族を養うために掘り出し物を探している男性のためのアポッローニオスの援助」（6.39）、「クニドスのアプロディーテー像に想いを寄せる男性にたいするアポッローニオスの説教」（6.40）、「地震の被害に見舞われたヘッレスポントス沿岸の諸都市へのアポッローニオスの支援」（6.41）、「葡萄酒をめぐる布告の取り消しをドミティアヌス帝に求めよとのイオーニアの民に対するアポッローニオスの鼓舞」（6.42）、「狂犬に噛まれたタルソスの若者のアポッローニオスによる治療」（6.43）となる。主人公アポッローニオスの優れた行いを描いているという点以外でこれらのエピソードに何らかの一体性を見出すことはおよそ不可能だろう。

しかしながら、ある特定のエピソード群に目を向けると、ピロストラトスが有機的つながりによってまとめられた小規模な「物語」を作ろうとしている様子がうかがえる。本稿で取り上げるのは、そういった場合のピロストラトスによる叙述技法で、キーワー

---

<sup>1</sup> ブルータルコス『対比列伝』やディオゲネース・ラーエルティオス『哲学者列伝』はこの代表と言えるだろう。また、ピロストラトス自身による『ソフィスト列伝』も同種の作品とみなしてよい。

<sup>2</sup> 『テュアナのアポッローニオス』のテキストは Jones ed. (2005a) および (2005b) を用い、参照箇所は、巻・章の数字のみ示すことにする。

ドとなるのは、「サスペンス」である。この文学的仕掛けを機能させるためには、作家は、叙述の順序に注意を払わなければならない、無計画にエピソードを並べるだけではその試みは失敗に終わってしまうだろう。私見では、この仕掛けがもっとも巧みに利用されているのが、二人の「反哲学者」皇帝であるネロー（在位後 54～68）とドミティアヌス（在位後 81～96）にたいするアポッローニオスの挑戦をテーマとする描写である（対ネローは第4巻と第5巻で、対ドミティアヌスは第7巻と第8巻で断続的に描かれている）。これらの場面は、（それ以外では絶対的に安全で有利な立場にいる）アポッローニオスが危機的な状況に陥るという意味で例外的であると言え、アポッローニオスの偉業の称揚を主目的とする本作のハイライトシーンとみなすべきである。そして、これに「物語」としての面白さを付与しているのが、まさにサスペンスという仕掛けなのである。

本論に入る前に、議論の進め方を示しておくことにしよう。まず第 II 節および第 III 節で、「基本的物語パターン」と称しうるピロストラトスの叙述の法則性を取り上げ、彼が読者の期待をコントロールする方法について検討する。そして、第 IV 節と第 V 節で、まずは「ネロー物語」、次に「ドミティアヌス物語」を材料として、「基本的物語パターン」を意識する読者に不安感を与えるサスペンスの技法がどのように用いられているか分析する。

## II. 基本的物語パターン（その一）—アポッローニオスと旅行先の支配者

『テュアナのアポッローニオス』は、基本的にはアポッローニオスがさまざまな土地を訪問する様子を描いた作品であるため、登場人物のバラエティは豊富で、各人物がそれぞれの個性を持っている。たとえばインドの王プラオーテース（第2巻に登場）とエティオピアの裸行者の頭テスペシオン（第6巻に登場）は、それぞれ別の考え方にもとづいて行動しているがゆえ、来訪者アポッローニオスとの関わり方にも両人で違いが見える。ただ、出てくる固有名詞や対話のテーマについてなど、細かい違いはいちど無視して、純粋に物語の展開の仕方にだけ目を向けると、本作はまったく同じパターンを繰り返しているということがわかる。先の例でいえば、プラオーテースの場面とテスペシオンの場面では、アポッローニオスとの対話の内容はまったく異なるのだが、物語の進み方自体は、双方で大差ないのである。この類の物語パターンを、本稿では「基本的物語パターン」と呼ぶことにしたい。その中身を簡単にまとめるならば、以下のようになる。

- (a) アポッローニオスが社会的に高い地位を有する人物に出会う。
- (b) 何らかのテーマについて議論がおこなわれる。
- (c) アポッローニオスの見解がより説得力のあるものとして示される（ただし、対話相手がこれに心底納得するかどうかは別問題）。

アポッローニオスは、誰と議論しようがけっして屈することはなく、常に勝者として描かれる。あるいは、Koskenniemi の評語を借りて、彼を常に正しい「教師」(teacher) とみなすと話がわかりやすくなるかもしれない<sup>3</sup>。

それでは、「基本的物語パターン」の具体例を見ていくことにしよう。これは、第 1 巻の開始部分付近 (1.7) で、さっそく確認できる。描かれているのは、若きアポッローニオスと彼の師匠エウクセノスの関わり合いである。アポッローニオスは、しばらくの期間はエウクセノスと過ごしていたが、この人物はもともとエピクーロス哲学を信奉し、食欲と肉欲の権化であったため、最終的には袂を分かつことに決める。そのとき、ピュータゴラス的な生き方を目指すアポッローニオスは、「先生は先生のやり方で、私はピュータゴラスのやり方で生きていくことにしましょう」と告げたという。高い地位にある人物にたいするアポッローニオスの余裕のあしらいは、若い頃の準備に由来するものなのである。

この類のアポッローニオスの「勝利」は、1.18 から始まる彼の世界旅行の描写で本格的に強調されることになる。本作の巻分けは、アポッローニオスの訪問先を基準としており<sup>4</sup>、巻ごとに一人、社会的に地位の高い人物が登場する。そしてアポッローニオスはそのそれぞれと議論を交わし、都度「勝利」をおさめるのである。これらはすべて「基本的物語パターン」の形成に寄与しているわけだが、以下、その具体的な様相を確認することにしよう。まず第 1 巻だが、アポッローニオスはバビロンを訪れ、この土地の支配者であるウーアルダネースとしばしの時を過ごす。この人物がアポッローニオスのことを狩猟に誘った際、アポッローニオスは、(ピュータゴラスの考えにしたがいがい) 動物を殺めることの残忍さについて相手に説諭する。また、アポッローニオスは、理想的な統治のあり方をウーアルダネースに教える。さらにウーアルダネースが病にかかったとき、アポッローニオスは魂について詳説し、相手の死の恐怖を取り除く (以上、1.38)。また、アポッローニオスは、ウーアルダネースの言動をときにきつい言い方で相対化しようとするのもいとわない。たとえば、ウーアルダネースがある村同士の評いの調停を 2 日で終わらせたと自慢したとき、「あなたは正義を見出すのに時間がかかるのですね」と評し、ウーアルダネースが自身の富を見せつけてきたときには、「私にとってはゴミです」と言い放つ (以上、1.39)。

第 2 巻で、アポッローニオスはインドの王ブラオーテースのもとに赴くが、やはり、この身分ある人物よりも上位の立場を得ることになる。ブラオーテースは、アポッロー

---

<sup>3</sup> Koskenniemi (2009)を参照。

<sup>4</sup> 第 1 巻はバビロン、第 2 巻・第 3 巻はインド、第 4 巻はイオーニア、第 5 巻はガデイラ、第 6 巻はエティオピア、第 7 巻・第 8 巻はローマ、といった分かれ方になっている。

ニオスの訪問を受けてからほどなくして、相手に強い魅力を感じ、「あなた [=アポッローニオス] は私よりも優れていると思います、というのも、知恵は、王にふさわしいものであるからです」と述べる (2.27)。アポッローニオスのことを強く信頼したプラオーテースは、自身が判決をくだすことになっている法的事案 (売買がなされた土地から出てきた黄金の獲得権をもつのは前の土地保有者か新しい土地保有者のどちらか、という問題) についてアポッローニオスに相談をすることにする (2.39) が、そのとき彼は、「私はあなたを助言者 (ζυμβουλον) としているのです」と述べる。注目したいのは、「助言者」という表現で、これは、ローマ帝政期の文献で用いられる、一種の役職を指す語である。その役職というのは、しばしば「哲学者」が任じられるもので、ローマ皇帝にたいしさまざまな政治的助言をおこなうというのを主な仕事とする<sup>5</sup>。たとえば『王政論 (一～四)』のディオーン・クリューストモスは明らかに「助言者」であるが、彼は、トラヤーヌス帝に向けて、為政者の理想のあり方について、ときに歯に衣着せぬ物言いで説明をおこなう。「助言者」は、一時的ではあるにせよ、ローマ皇帝のごとき有力者にも遠慮や付度の不要な存在として振舞うことができるわけである。したがって、このたび「助言者」となったアポッローニオスも、プラオーテースの行動を動かせる資格が与えられていることになる。事実、この裁判のエピソードも、「アポッローニオスの意見が是とされた」というところで閉じられる。

第3巻で出てくる高位の人物は、間違いなく、インドの賢者団 (σοφοί) の頭イアルカースであるが、彼は、アポッローニオスの後塵を拝することがないという意味で、例外的な人物である (とはいえ、イアルカースはアポッローニオスのことを見下しているわけではけっしてない)。ただ、これを補うことを目的とするかのように、ピロストラトスは、本巻で別の高位の人物を登場させ、アポッローニオスの卓越性を示そうとする。その人物とは、(プラオーテースとはまた別の) インドの王 (名前は与えられていない) で、彼は、イアルカースのもとを訪れ、そこにいたアポッローニオスとも言葉を交わす。この王は、初めこそ、ギリシアにかんする事物を軽蔑していたが、ペルシア戦争におけるギリシア人とクセルクセースの関係性にかんするアポッローニオスの話を聞くと、自分の当初の考えを捨て去ってしまう<sup>6</sup>。アポッローニオスが議論を進めるなか、この男は突如目に涙を浮かべ、「今後はギリシア人に献酒をし、彼らを称賛し、可能なかぎり彼らに祈りを捧げます」(3.32) と述べ、偏見からくる自身の誤解を認める。そばにいたイアルカースは、アポッローニオスのことを「助言者」(ζυμβούλου) と呼んだうえで、インドの王に「陛下は知恵のある男 [=アポッローニオス] によって以前より優れた人物とな

<sup>5</sup> 「助言者」について、より詳しくは Rawson (1989) を参照。

<sup>6</sup> アポッローニオスは基本的に「ギリシアの擁護者」であることを忘れてはならないだろう (この点については、Swain (1999) を参照)。

りました」(同)と述べる。この第3巻でもやはり、アポッローニオスの優位は保たれているのである。

本節で扱う最後の有力者の例は、第6巻のテスペシオンである。アポッローニオスは、このエチオピアの裸行者の頭とさまざまなテーマについて議論をするのだが、まず話を始めるのはテスペシオンのほう(6.10)で、彼は、エチオピア人の生き方のほうが、インド人のそれよりも優れていると主張する。この発言にたいし、インド人に敬意を抱くアポッローニオスは以下のように応答する。

「私は、あなた方 [=エチオピア人たち] を生き方の助言者 (ζυμβούλους) とする目的で来たのではありません。自身で納得のいく道をすでに見つけておりますので。私は、テスペシオン様を除けば、あなた方の誰よりも年が上です。もしあなたがまだ道を見つけていなかったのなら、私みずからより適切な仕方では知恵の選択について助言をおこなった (ζυμβούλευον) でしょうに。私はこのように年を重ねておりますし、また、じゅうぶんに知恵を蓄えてもおりますが、あなた方に私の見解の判定人になっていただくのを躊躇いたしません。その際、私の選択がいかにか正しいものであるか教示してさしあげます。それ以上に優れたものはいまだかつて聞いたことがありませんので。」(6.11)

アポッローニオスがテスペシオンに同意しようとしていないのは明らかだが、とくに注目したいのは、やはり「助言者」という名詞ないし「助言をおこなう」という動詞である。アポッローニオスにとって、テスペシオンが「助言者」となることはあり得ず、むしろ逆に、自分が「助言をおこなう」側になる可能性に触れている。この言葉のあと、アポッローニオスは自身の見解を具体的に展開させていくのだが、彼は、自分のほうこそまさに「助言者」であることを証明することになる。というのも、アポッローニオスの話の直後、「テスペシオンの顔一肌の色は黒かったが―が赤くなったのは明らかだった」(6.12)とされているからである。

### III. 基本的物語パターン (その二) —アポッローニオスと三人のローマ皇帝

さて、前節では、各巻の代表的な「上位者」(と呼ぶことにする)をアポッローニオスが打ち負かす場面を取り上げ、そこに「基本的物語パターン」があることを確認したが、このパターンが観察できるのは、アポッローニオスが上記の人物たちを相手にしたときのみにとどまらない。彼らに加えて検討する必要があるのは、三人のローマ皇帝、すなわち、ウェスパシアヌス(第5巻に登場)、ティトゥス(第6巻に登場)、ネルウァ(第8巻に登場)のケースである。この三人の「上位者」を前にしても、アポッローニオスは、けっしてひるまずに、それどころか揺るがぬ自信をもって、自説を展開していくの

である。

それではまずウェスパシアヌスのケースから見てみよう。この皇帝は、エジプトでアポッローニオスと面会し、統治のあり方にかんして彼に助言を求める。いま取り上げたいのは、両人が初めて顔を合わせる様子を描く場面である。

彼 [=ウェスパシアヌス] は、犠牲式を終えたものの、まだ諸都市と正式にはかかわっていないなかったわけだが、そのときアポッローニオスに語りかけ、あたかも彼に祈りを捧げるようにして「私を皇帝に据えてください」と言った。するとアポッローニオスが答えた。「すでにそういたしました。というのも、私は以前、正義を重んじ、高貴で、思慮深く、白髪頭をしており、嫡出子の父である者が皇帝となるよう祈りを捧げたのですが、まさにあなたこそが、私が神々に求めた人物だったのです。」ウェスパシアヌスはこれに歓喜した。(5.28)

注目すべきは、ウェスパシアヌスが「皇帝」の称号を得るのにアポッローニオスの許可を必要としている、という点である。「あたかも彼 [=アポッローニオス] に祈りを捧げるようにして」(ὡςπερ εὐχόμενος αὐτῷ) という表現から、アポッローニオスがウェスパシアヌスより立場が上であることが確認できるだろう。アポッローニオスは、「神」のごとき存在なのであり、ゆえに「人間」であるウェスパシアヌスは、この哲人に従属すべき者として提示されているのである。

このウェスパシアヌスの息子であるティトウスもまた、アポッローニオスの崇拜者のごとく描かれている。皇帝となったティトウスが自身の若さについて消極的な見解を示したとき、アポッローニオスは、若年というものは老年と結びついたとき重要な要素となると励まし、高齢の皇帝であった彼の父親ウェスパシアヌスを模範とするよう助言する(6.31)。また、ティトウスが自身の最期についてアポッローニオスに問うたとき、アポッローニオスは、彼の死はオデュッセウスのそれと同様「海から」(ἐκ θαλάσσης) やって来る、と答える(6.32)。この回答の背景にあるのは、ホメロスの『オデュッセイア』で、冥府にいるテイレシアースが訪問者オデュッセウスに与える予言である。この引喩<sup>7</sup>を考慮に入れると、アポッローニオスはテイレシアースに、ティトウスはオデュッセウスに比されていることがわかる。つまり、対ティトウスの場合でも、アポッローニオスは神的な存在として描かれており、「人間」であるティトウスより立場が上であることが明確にされているわけである。

ネルウアについても、ウェスパシアヌスおよびティトウスと同じように、「神」のア

<sup>7</sup> 『デュアナのアポッローニオス』と『オデュッセイア』の(間テクスト的な)つながりについては、たとえば van Dijk (2009)を参照。

ポッローニオスの僕のごとく提示されている。彼は、アポッローニオスに宛てた手紙のなかで、ドミティアヌスの死後に自分が皇帝としての権力を手にすることができたのは、「神々と彼 [=アポッローニオス] の意思」(θεῶν τε βουλαῖς καί κείνου) によるものであると述べており(8.27)、ここでも再びアポッローニオスの神性が強調されていることが認められる。この手紙にかんしてもうひとつ面白いのは、アポッローニオスが「助言者」(ζύμβουλος) となればその権力は容易に保持できるだろう、とされている点である。「助言者」は、前節で取り上げた、プラオーテースをはじめとする有力者たちがアポッローニオスに与えた職務であったことを思い出そう。ネルウァを相手にした場合でも、やはりアポッローニオスは強い影響力を行使できる立場にいたのである。

さて、以上のように、ウェスパシアヌス、ティトゥス、ネルウァという、最高権力を有するローマ皇帝を相手にしたときでも、アポッローニオスは師匠のごとく振舞っており、第I節の結論と同様、ここにもまた、「基本的物語パターン」が見て取れる。アポッローニオスは「上位者」の上に立つのである。ただ、本節の結論は、第I節のそれよりもいっそう重要である。というのも、本稿の議論の主たる対象は、ネローとドミティアヌスという、これまた「ローマ皇帝」であるからである。読者の立場でローマ皇帝とアポッローニオスの関係性をとらえてみると、アポッローニオスが、ウェスパシアヌス、ティトゥス、ネルウァを配下に置くことができるのならば、当然、ネローとドミティアヌスもそのようにできるだろう、と期待するはずで、ここにピロストラトスによる読者心理のコントロール方法が機能していることがわかる。ウェスパシアヌス、ティトゥス、ネルウァの描写をつうじて、ネローとドミティアヌスもまたアポッローニオスに従属することが暗示的に予告されているわけである。ただ、ネローとドミティアヌスのエピソードの場合、この「基本的物語パターン」は、じつは「サスペンス」という別の文学的装置と組み合わせられており、事情はより複雑である。言い換えれば、この二者にかんしては、ピロストラトスは、手の込んだ「物語」を作り出している。その「物語」の作られ方については、節を新たにしておいて論じることにはしたい。

#### IV. ネロー帝に敵対するアポッローニオス

さて、本作でとくに注目すべきローマ皇帝二人のうち、まずはネローのほうを取り上げよう。先述のとおり、この人物をめぐるのは、小規模な「物語」が形成されており、その位置は、4.35から5.11まで(ただし、ガデイラの地理的・民族誌的な説明がなされる5.1~5.6には断絶がある)である。この配置は、ネローという存在が、ドミティアヌスと組み合わせり、アポッローニオスに訪れる危機の「第一波」となっていることを示している。というのも、この「ネロー物語」は、全8巻から成る本作のちょうど中央に位置しており、本作の末尾に配置された、危機の「第二波」を描く「ドミティアヌス物語」とちょうど対になっているからである。このような物理的位置という点から見て、

ピロストラトスが、この「ネロー物語」を（「ドミティアヌス物語」とともに）特別扱いしていると判断することができる。

この物語は、「ネローは哲学を許さず、哲学に携わる者は、彼には詮索好きの俗物で、ひそかに魔術を駆使する輩にしか見えず、かつて法廷で檻褻を目にしたときは、魔術を隠蔽するための衣だとみなして不愉快に感じた」（4.35）という叙述で始まる。ネローは、哲学を本務とするアポッローニオスにとっての大きな脅威として登場するわけである。彼より前に出てくるウーアルダネース（第1巻）、プラオーテース（第2巻）、名無しのインド王（第3巻）の役回りにもとづく「基本的物語パターン」が頭に入っている読者は、この「上位者」ネローもアポッローニオスに屈服せざるをえないとまずは予期することになる。ただ、今回の場合、アポッローニオスの優位がそれほど安定したものとして示されるわけではない。というのも、本エピソードの開始時点から、しばらくのあいだ、アポッローニオスにたいする危機をあらわすサスペンスの状況が作られていくからである。弁論家ピロラーオスからネローの残忍さについて聞いた（詳しくは後述）のち、アポッローニオスは酒に酔った音楽家に出会う。この人物は、ネローを称える歌を歌いながらローマの方々を巡り歩き、聴衆からお金を得ており、もし自分の演目に興味を示さなかったり、自分にお金を出さないような者がいれば、逮捕ができる権限を有していた。しかしながら、アポッローニオス一行は、この音楽家のパフォーマンスに無視同然の態度をとり、その結果、この男をして「ネローを冒瀆し、神の声に敵対する奴らだ」（4.39）と言わしめる。アポッローニオスがネローから何らかの攻撃を受けることが予測される展開である。

この不穏な空気は、もう少し先で、アポッローニオスが、ネローの側近の一人ティゲッリーノスに目をつけられる場面（4.42）でも継続される。この人物は、ネローのことを公然と非難していた、アポッローニオスの友人デーメートリオスのことをローマから追放し、さらに、ネローに反抗するようデーメートリオスを促しているという疑惑のあったアポッローニオスのことも追跡していた。「ネロー物語」はネローの哲学嫌いの強調から始まることを先に確認したが、このように、哲学に携わる人間が現に迫害されることになり、アポッローニオスの未来に暗雲が立ち込めることになるのである。

この類のサスペンスは、第4巻の末尾において、ある特殊なかたちでまとも提示される。ここでは、アポッローニオスが、「ローマのソークラテース」と呼ばれる後1世紀のストア派の哲学者ムーソーニウス・ルフス<sup>8</sup>と取り交わしたとされる（疑似）書簡が紹介される。ピロストラトスがこの位置でムーソーニウスに言及するのは、以下のごとく、「ネロー物語」の冒頭（4.35）でムーソーニウスに触れていることと関係しているのは

<sup>8</sup> 「ローマのソークラテース」としてのムーソーニウス・ルフスについては、Lutz (1947)を参照。



間違いない。「バビロンのムーソーニウスーアポッローニオスに次いで優れた人物一は、その知恵ゆえ捕縛され、獄中では危険な状態に置かれていた。大きな活力をもっていなかったら、彼は捕縛者のために死んでしまっていただろう。」この出だしによって、読者はアポッローニオスをムーソーニウスと同類の存在ととらえるよう促される。この哲学者2人の往復書簡の内容は以下のごとくである。

アポッローニオスから哲学者ムーソーニウスにご挨拶を送ります。アテーナイ人のソークラテースは、自身の友人たちによって解放されることを望まず、法廷へと足を運び、そして死にました。お元気で。

ムーソーニオスから哲学者アポッローニオスにご挨拶を送ります。ソークラテースが死んだのは、自身の弁明の準備をしなかったためです。私は弁明をするつもりです。お元気で。

話題になっているのは、アニュトスとメレートスによって告発され、法廷に召喚されるものの、最終的には牢獄で死んでしまった、あのソークラテースである。中身は、ソークラテースの解放に失敗した友人クリトーンを中心人物とした、プラトーンの『クリトーン』を土台にしているのは明らかだろう。アポッローニオスがソークラテースに重ねられているわけなので、ソークラテースの死はアポッローニオスの死を暗示することになるだろう。

「ネロー物語」におけるサスペンスの醸成にかかわる要素として、神話範例（英語でいう *mythological paradigm*）を無視することはできない。ピロストラトスは、一連の描写のなかで、当該地点でのアポッローニオスと同じ境遇にある神話上の人物に触れることがある。言及される人物は、読者がその詳細を知っていることが前提となっているような有名な者たちで、読者は、その知識を頭のなかで運用しながら、アポッローニオスの状況をとらえることになる。

具体例を見ていくことにしよう。最初に出てくるのは、哲学者たちにたいするネローの圧力ゆえアポッローニオスにローマ訪問をやめさせようとするピロラーオスの言葉（4.36）のなかである。この男は、ネローとの面会によってアポッローニオスが払うことになる代償は、「キュクロプスのもとを訪れたオデュッセウスの場合」よりも高い、と述べたうえで、「この英雄は、怪物を見ることを欲したがために、多くの仲間を失い、異常で野蛮な光景に圧倒された」と付け加える。前提とされているのは、ホメロス『オデュッセイア』第9歌で、オデュッセウス（および彼の仲間たち）が一つ目の巨人キュクロプスに苦しめられるというエピソードである。アポッローニオスがオデュッセウスに、ネローがキュクロプスに比されているこの範例においては、小さからぬサスペ

ンスの空気が生まれているといえる。というのも、イタケーの英雄同様、テュアナの英雄もまた、怪物的ローマ皇帝により仲間を失い、彼の猟奇的な行動を見させられることが暗示されているからである。

2つ目の例は、この1つ目の例のすぐあとに出てくる。ピロラーオスの警告ののち、それまでアポッローニオスにつき従ってきた者たちの大半が恐怖心ゆえ彼のもとを離れてしまい、その数は、34人から8人にまで減る(4.37)。これを受けて、アポッローニオスは、残った従者たちに向けて励ましの言葉を述べるのだが、このなかで、神話範例が使われるのである。ネローによる悪名高い母親殺しについて話をするなかで、アポッローニオスは以下のように述べる。

「同じことがオレステースとアルクマイオーンの身にも生じたが、この二人の場合は、凶行を正当化する存在として父親がいた。一方 [=アガメムノーン] は自分の妻 [=クリュタイメストラー] に命を奪われ、他方 [=アンピアラールオス] は首飾りによって売られた。しかしながら、この男 [=ネロー] の場合、母親のおかげで高齢の皇帝 [=クラウディウス] の養子となり皇帝位を継いだにもかかわらず、その母親を葬ったのだ。」(4.38)

オレステースとアルクマイオーンを比較対象とすることにより、アポッローニオスは、いかにネローが残忍であるかを強調する。彼の母親殺しは、父親の復讐という大義名分を有していたオレステースおよびアルクマイオーンのそれに比べ、正当化が著しく困難、というわけである。この神話範例は、直前の『オデュッセイア』の範例ですでに作りだされたサスペンスを強化することになるだろう。示唆されているのは、母親を殺したネローは、常人の理性を保持しておらず、アポッローニオスならびに彼の従者たちなどたやすく亡き者になってしまう可能性がある、ということである。

以上の2つの神話範例のすぐあと、ピロストラトスはさらに別の範例を重ねて提示する。それが見出されるのは、ふたたび、数少ない従者たちに向けてアポッローニオスが発する言葉のなかである。

「活力が湧いてきたなら、私たちはローマへ向かおうではないか。哲学を放逐するというネローの法規にたいしては、私たちは、こんなソポクレースの詩句を持っている。「このような法規を定めたのはゼウスではありません」、また、ムーサイでもなく、理性の神アポッローンでもないのだ。ネロー自身もおそらくこの詩句を知っているだろう。聞くところでは悲劇を愛好しているみたいだから。」(4.38)

ソポクレースの詩句として示されている「このような法規を定めたのはゼウスではあり

ません」というのは、『アンティゴネー』で、テーバイ王クレオンが定めた法規を激しく非難するアンティゴネーによる台詞のひとつである。類比関係の特定は容易で、アポッローニオスがアンティゴネーに、ネローがクレオンにたとえられている。この神話範例は、上で取り上げた2つの範例に比べ、より複雑な効果を生み出しているように思える。後者は、ネローの凶暴さにアポッローニオスが屈服を余儀なくされることが暗示されているのに対し、前者においては、ネローにたいするアポッローニオスの抵抗が最終的にどのような結果を生むのかが曖昧にされているのである。これは、『アンティゴネー』の曖昧さに起因している。本劇では、アンティゴネーとクレオンの対立が描かれているわけだが、最終的な「勝者」がどちらであるのかという点については、確言し難い。アンティゴネーは、ポリュネイケースの遺体の埋葬を完遂するという点では、「勝者」であるが、結局は死んでしまう<sup>9</sup>。クレオンは、アンティゴネーの排除に成功するという意味では「勝者」とみなされうるが、最終的には息子ハイモーンと妻エウリュディケーを失い、究極の孤独を味わうことになる。ソポクレスは、勝負の結果を意図的に曖昧にしているわけである。これを念頭に置きつつ問題の詩句に戻ると、この詩句は、一方では、アポッローニオスあるいは哲学全般の勝利を予示しているのとらえることができる。アンティゴネー的アポッローニオスがクレオン的ネローの「法規」を退ける、というわけである。ただ、同じこの詩句は、他方で、アポッローニオスの敗北を暗示しているとも解釈できる。クレオン的ネローの「法規」に背いたがゆえ、アンティゴネー的アポッローニオスは死ぬことになるというわけだ。『テュアナのアポッローニオス』の読者は、『アンティゴネー』の読者（ないし観客）が見出すのと同じ両義性を感じるという構図が出来する。ピロストラトスは、アンティゴネーの詩句の引用によって、以降の展開が読者にとって不確実になるよう企図しているのである。

## V. ドミティアース帝に敵対するアポッローニオス

さて、次に、ネローとペアになってアポッローニオスに敵対する人物の二人目、ドミティアースについて考察しよう。本作の最後の二巻で描かれる「ドミティアース物語」は、アポッローニオスにたいする危機の「第二波」を主題としており、その大まかな流れは以下のとおりである。(1) 敵愾心ゆえのドミティアースによるアポッローニオスの投獄、(2) アポッローニオスの獄中生活、(3) アポッローニオスの長大な弁明の演説、(4) アポッローニオスと友人たちの無事の再会、(5) ステパヌスという人物によるドミティアースの暗殺。この物語においても、「ネロー物語」同様、サスペンスの技法が巧みに用いられており、ピロストラトスが単なる言行録作成人ではないことが確認できる。

<sup>9</sup> 彼女の死が自殺によるものであることも、事態を複雑化させている。彼女は、仇敵のクレオンに（文字通り）「殺された」わけではない。

「ネロー物語」がサスペンス（哲学にたいするネローの嫌悪感の強調）で始まるのにたいし、「ドミティアース物語」は、アポッローニオスとドミティアースの最終的な勝敗の提示から始まる。

ドミティアースの独裁の期間、かの男 [=アポッローニオス] のことを非難と告訴が取り囲んでいた。それがどのように開始され、どこから生じ、一つ一つどのような名目が与えられたのかについては、またあとで語ることにする。語る必要があるのは、彼が何を話したのか、自身が捕えられるのではなくむしろあの独裁者 [=ドミティアース] を捕えて審問の場を去ったとき、どのような者とみなされたのか、ということである。(7.1)

下線部は、ドミティアースが設えた審問の場でのアポッローニオスにたいする言及である。一見して明らかなように、「ドミティアース物語」が始まった時点で、アポッローニオスの勝利が予告されている。したがって、読者は、アポッローニオスが社会的強者にたいして優位に立つという「基本的物語パターン」を意識してこの物語を読みすすめていくことになる。

ただ、このことは、「ドミティアース物語」が（最初から結果が分かっているという意味で）屈辱であることをかならずしも意味しない。たしかに、読者は、最終的に勝利をおさめるのはアポッローニオスであることを知っているが、彼は、最初から最後まで安全な状態にいるわけではない。それどころか、ピロストラトスは、ところどころでサスペンスをつくりだし、アポッローニオスの破滅を読者に予感させるよう工夫をおこなっている。たとえば、先の引用の少しあとの箇所、ピロストラトスは、ネローとの比較というかたちで、ドミティアースを屈服させることの難しさを強調している。

琴や笛にうつつを抜かしているネローに攻撃を加えることなど、まったく立派なことではない。反対に、ドミティアースについて、人々はどのような話をしているだろうか。彼は強壮な身体をもち、楽器や大きな音で心を女々しくさせてしまうような快楽を拒絶し、他者の痛みや人の苦しみの種を喜ぶべき対象とし、また、不信感なるものを、独裁者にたいする民衆の、民衆にたいする独裁者の見張り番と考へ、為政者にとつて夜は、あらゆる仕事が終わりに、殺人が始まるときととらえていた。(7.4)

ネローとの比較をつうじてドミティアースの強敵のイメージを増幅させるというやり方は、デーメトリオス（先に見たとおり、ネローに楯突いた彼はいちどローマから追放されている）によっても採られている。彼は、ドミティアースの攻撃から逃げようとならないアポッローニオスにたいし、以下のような説得の言葉を向ける。

「もしあなた [=アポッローニオス] がネローのときのことを忘れていないのなら、あなたは私の気持ちと、あとは私が死を恐れるような人間ではないことをきっとわかっているでしょう。…私は、あなたおよび私自身の教義…をつうじて我が身に剣が差し向けられるようなことをしましたが、彼 [=ネロー] は私を殺しはしませんでした。彼が私を殺さなかったのは、あのときちょうど彼の演奏の技術が向上しており、魅力的な素晴らしい音楽を奏でているという自負があったからです。ところがいま私たちは、どのような素晴らしい音楽、どのような琴に身を捧げればよいのでしょうか。あらゆるものが音楽とは無関係で、悪意で満たされ、このたびの為政者 [=ドミティアース] は自分によっても他者によっても魅了されるということがないのですよ。」  
(7.12)

以上の叙述を目にした読者は、アポッローニオスが、「音楽家」ネローのときほどうまくドミティアースを退けることはできないはずと予測するだろう。たとえ最終的な勝利が約束されているとしても、そこに至るまでの過程でアポッローニオスが危難を経験する可能性が示されているわけである。アポッローニオスは、どんなときでも危険とは無関係というわけではない。この意味で、「ドミティアース物語」にはサスペンスが存在しているのである。

「ドミティアース物語」のサスペンスにおいてキーとなるのは、哲学者ソクラテースの存在である。「ネロー物語」の議論のなかで、アポッローニオスとソクラテースの類比関係によってサスペンスの空気がつくりだされているのを確認したが、じつは、この「ドミティアース物語」においても、この二者が重ね合わされており、結果、同様の効果が生まれているのを見て取ることができる。ひとまずアポッローニオスの弁明の演説の部分（これについては後述）を除くと、ソクラテースの名前は、2度現れる。1 つ目は、アポッローニオスが従者のダミスとともにイタリアの都市ディカイアルキアを訪れる場面のなかである。アポッローニオスは、ドミティアースの政敵ネルウァへの支援ゆえ、この時点でドミティアースに捕縛されることを予期していたわけだが、そんななか、デーメトリオスに出会う。この人物は、アポッローニオスが置かれた状況を心配しつつ、以下のように述べる。

「…知恵 (σοφία) は糾弾の材料となっています。アニュトスとメレートスの訴訟の文言は『ソクラテースは、若者を墮落させており、珍妙な神格を導き入れているため、有罪である』というものですが、私たちにたいする訴えは、このようなものです。『とある者は、知恵の持ち主 (σοφός)、正義の士であり、神々を知悉し、人間を知悉し、法律についても多識であるため、有罪である』。あなた [=アポッローニオス] は、

私たちのなかでもっとも知恵ある方 (σοφώτατος) であるゆえ、さらに知恵を使った (σοφωτέρα) 非難があなたに向けられているのですよ。」(7.11)

デーメトリオスは、「知恵」(σοφία) が災いして訴訟を起こされた人物としてソクラテースの名前を出し<sup>10</sup>、彼と、同じく優れた「知恵」を持つアポッローニオスとを類比的に示している。裁判後のソクラテースの体験がどのようなものであったのかを知る読者にとって、彼とアポッローニオスの重ね合わせはもちろん不吉なものに映る。ソクラテースが刑死となったように、アポッローニオスもまた命の危険にさらされる可能性があることが暗示されているのである。

ソクラテースの名前は、第8巻の冒頭部にも見える。ここでは、アポッローニオスが、ドミティアヌスの糾弾にたいする自己弁明のために法廷に入る前にとっていた行動について描述される。アポッローニオスは、法廷の役人と簡単な会話を交わすことになるが、そのなかに、以下のようなやりとりがある。

「…私 [=アポッローニオス] は、法廷での沈黙が第四の有効手段であることを知っている。」役人が「そんなものは役に立たないですよ、あなたにとっても、危険な状態に陥りそうなどんな者たちにとっても」と言うと、アポッローニオスは、「いや、実際のところ、ソクラテースには、訴訟事案から身を守るとき、おおいに役に立ったのだ」と答えた。役人が「どういう風に役に立ったのでしょうか、沈黙したがゆえに死んでしまったソクラテースにとって」と聞くと、アポッローニオスは、「彼は死ななかつたのだ、アテーナイ人が勘違いしただけなのだよ」と応じた。(8.2)

ここでは、ソクラテースの「沈黙」に焦点が当てられているわけだが、これはおそらくプラトンの『クリトーン』の描写が土台となっている。この対話篇で、ソクラテースは、アテーナイの指導者たちによる言いがかりにも等しい訴えにたいし、牢獄にて「沈黙」を貫く(クリトーンら友人たちが勧める脱獄の提案を退ける)ことにより、死んでしまう。この場面においても、先の場面と同様、ソクラテースの死への言及によって、アポッローニオスの死がちらつくようにされているのである。

「ドミティアヌス物語」においてアポッローニオスとソクラテースが並列されている記述のなかでもっとも重要なのは、「アポッローニオスの弁明」(本節冒頭の区分の(3))におけるそれであろう。この部分(8.8)は、(本稿で用いている)ローブ版で見開き約30頁(!)という途方もない長さをもつ。ひとつの節としては本作中最大の分量

<sup>10</sup> ちなみに、アポッローニオスは、テスペシオンとの議論のなかで、ソクラテースの「知恵」を強調している(6.19)。

を有するこの「アポッローニオスの弁明」は、これ自体で独立しているとみなすことができ、モデルとされているのは、間違いなく、プラトンの『ソクラテースの弁明』であろう。いま注目したいのは、この「弁明」の出だし付近に見える、アポッローニオス<sup>11</sup>の力強い発言である。

「私は、かつてのアテーナイ法廷のソクラテースすら冒さなかったような危険を冒そうとしているのです。…私たち二人 [=アポッローニオスとソクラテース] を襲う危険は、ひどく苛烈なものなのですが、私は、陛下 [=ドミティアース] ほどの方にたいしても、私が確信していることにかんして助言をおこなう (συμβουλεύειν) のを躊躇しません。」

アポッローニオスは、自分が冒そうとしている危険がソクラテースのそれよりも大きいと述べており、この時点で、アポッローニオスが無事ではいられないことが予想される。見過ごしてはいけないのは、「助言をおこなう」という動詞である。この動詞は、先に引用した、テスペシオンに向けたアポッローニオスの言葉のなかでも見られたが、あのエチオピアでのやりとりでは、最終的には、「助言をおこなう」アポッローニオスにテスペシオンが屈する、という流れ（本稿で「基本的物語パターン」と呼ぶもの）が観察できた。「助言をおこなう」者は、その相手より上位に立つことができるわけだが、いまアポッローニオスの目の前にいるのは、テスペシオンのような「小物」ではなく、ドミティアースという「大物」である。そういう人物に「助言をおこなう」というのであるから、アポッローニオスが安全でいられることは考えづらい。『ソクラテースの弁明』において、ソクラテースは、告発者たちにたいしもはや挑発としか呼べない行動に出るわけだが、ドミティアースにたいし「助言をおこなう」アポッローニオスも、これとまったく同じことをしている。読者のなかでアポッローニオスの死が予感されるのは必定だろう。「弁明」の、少なくとも最初の部分には、このような意味でのサスペンスの空気が付与されているため、落ち着いた気持ちで読み進めることは不可能なのである。

## VI. 結論

ピロストラトスは、『テュアナのアポッローニオス』において、「基本的物語パターン」と呼ばれるひとつの型を用いている。たびたび読者が見出すのが、主人公アポッローニオスが、訪問先の有力人物（「上位者」）より優位に立つ姿で、これにより読者は、彼

<sup>11</sup> 「弁明」の直前（8.7）に、ピロストラトスがアポッローニオスのことを（ソクラテースのごとき）「知恵を有する男」（σοφῶν... ἀνδρῶν）と呼んでいる点も銘記しておきたい。

にどのようなことが起ころうと、平静でいられることになる。

ただ、これには、「ネロー物語」と「ドミティアース物語」という例外がある。この2つを読みすすめる際においては、読者は常に落ち着いた気分でいられるわけではない。というのも、ピロストラトスが随所でサスペンスを作りだしているからである。読者は、最終的な勝者がアポッローニオスであることを認識しつつも、ネローとドミティアースの圧力と戦う彼にたいし、不安を覚えてしまう。ひょっとするとアポッローニオスはこの極悪の権力者に屈服してしまうのではないか、という危惧の念が出てくるわけである。

『テュアナのアポッローニオス』で描かれる出来事は、たしかに「ワンパターン」であるかもしれないが、ピロストラトスは、起伏や変転といった「物語」的要素とまったく無縁なわけではない。本稿で扱ったサスペンスの技法は、作家としての彼の才能のひとつのあらわれとみなすことができる。

## 参考文献

### 【一次資料】

- Jones, Christopher P. ed. (2005a) *Philostratus The Life of Apollonius of Tyana, I* (Cambridge (Mass.)).
- Jones, Christopher P. ed. (2005b) *Philostratus The Life of Apollonius of Tyana, II* (Cambridge (Mass.)).

### 【二次資料】

- Koskenniemi, Erkki. (2009) 'The Philostratean Apollonius as a Teacher' in Kristoffel Demoen and Danny Praet eds., *Theios Sophistes: Essays on Flavius Philostratus' Vita Apollonii* (Leiden), 321-34.
- Lutz, Cora E. (1947) 'Musonius Rufus "The Roman Socrates"' (YCS 10: 3-150).
- Rawson, Elizabeth. (1989) 'Roman Rulers and the Philosophic Adviser' in Miriam Griffin and Jonathan Barnes eds., *Philosophia Togata I: Essays on Philosophy and Roman Society* (Oxford), 233-58.
- Swain, Simon. (1999) 'Defending Hellenism: Philostratus, *In Honour of Apollonius*' in Mark Edwards, Martin Goodman and Simon Price eds., *Apologetics in the Roman Empire: Pagans, Jews, and Christians* (Oxford), 157-96.
- van Dijk, Gert-Jan. (2009) 'The *Odyssey* of Apollonius: An Intertextual Paradigm' in Ewen Bowie and Jaś Elsner eds., *Philostratus* (Cambridge), 176-202.